

随想「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第34回 「いき」な人生、「いき」な国

1. 「いき」は「サムライ」の精神

前回、日本人が「甘え」を克服するために、「サムライ」のDNAを呼び覚ますことを提案した。「サムライ」の精神を持てれば、「甘え」を克服し、あの海洋民族を目指した戦国から安土桃山期に至る日本人の後継者となるはずだ。海洋民族日本人は、「サムライ」であり、自分の生きざまは自分で責任を取り、決して人に依存しない「自由を愛する強い個人」であるはずだ。

海洋民族の文化は鎖国と幕藩体制の中で封じ込められたが、その中で「サムライ」のDNAは遅しく生き残った。それを象徴する言葉を伝統的な日本語の中で探すと、「いき」という表現が最も適切な気がする。

「いき」な日本人は、個人として逞しいが人に責任転嫁をせず、チームワークを大事にする。が、人に「甘え」ず、その心は世界に広く開いているはずだ。争えば決して人に負けないが、人の足を引っ張ることは無い。そして、文化を深く愛する魅力的な日本人のほ

ずだ。
今の日本人は大人になっても母親への依存心である「甘え」が消えず、社会に出て、母親の代替物を求め、それが何とかわしてくれと期待し「甘え」ている。何が起きて、社会が悪い、政治が悪いと人のせいにし、まるで、子供

が、最後は母親が出て来て何でも尻拭いしてくれると「甘え」ているようなものだ。しかし、それは、「いき」でない。

西欧社会では、絶対王制を打倒したその瞬間から、国も社会も、自分の人生も、自分で責任を取らなければならなくなったが、この様に自分で責任を取ることこそ、血と汗を流して獲得した「自由」そのものと考ええる。

が、何でも人にやってほしい日本人にとって「自由」とは、勝手気ままに好きなことをすることであり、無責任の極みということになる。しかし、自分で自分の人生、社会、国に対して責任を取るべきであり、それが「いき」だ。「いき」とは西欧人が「自由」を愛することと同義である。

日本人は個人主義という、自分のことだけ考える利己主義と同義だと思っている。何処までも集団依存で、甘やかしてくれる母親中心の家庭のぬくもりから抜け出せないからだ。その結果、日本人の集団は、閉鎖的な「ムラ」となり、「タコソボ」化する。そこでは組織防衛が優先し、社会的責任などどうでもいい。

東電を中核とする「原子力ムラ」をみれば、福島第一原発の重大事故を起こしても、「ムラ」は簡単に揺るがない。しかし、「ムラ」や組織を優先するのは「いき」でない。集団依存でなく、個人が個人として逞しくあるのが「いき」

なのだ。

すでに豊かな成熟社会を獲得した日本人にハングリー精神を求めてもそれは無理だ。文化や芸術を愛し、自然の美しさを愛する余裕を持たなければならぬ。しかし、競争すべき時は誰にも負けずに逞しく闘い、同時に謙虚さと人への思いやりは失わない。それが、「いき」な日本人であり、その日本人が「いき」な日本をつくれるのだ。

2. 「いき」の構造

「いき」という言葉を研究してくれた偉大な先達者がいる。哲学者の九鬼周造（1888～1941）だ。九鬼は、「いき」の構造」という論文を昭和5年（1930年）に岩波書店から発表し、いまでも岩波文庫の一冊だ。私も、学生時代から何回も読み返した魅力ある名著だ。

岩波文庫の中では、戦後の著名な仏文学者である多田道太郎が解説文をつけてくれている。それによると、九鬼は、男爵九鬼隆一の四男で母は京都の花柳界出身だそう。1921（大正10年）から1929年（昭和4年）にかけてヨーロッパで過ごしたあと、帰国し京都大学教授に就任している。パリの哲学会では若き俊秀としてハイデガーに愛されたそう。当時のヨーロッパの実存主義のうねりの中で育ち、サルトルの家庭教師も務めたという。

「『いき』の構造」は、パリ時代に書き始めたが、それを多田は「目前の現実（パリ）を超えて、はるかかなたに、理念化された東洋の文化のひとつの型をあたまたまうかべていた」と解説している。

私は、九鬼がヨーロッパ文化にどっぷりつかりながらも、「いき」の構造」と取り組んだのは、「いき」という日本語の中に、西洋の自由や個人主義と共通のものを深く意識しながら、東洋の文化の深遠さを感じたからだと思像している。

九鬼の母は京都の花柳界出身だったが、九鬼自身も離婚後祇園の芸妓と再婚している。彼は「いき」を考える時、京都の花柳界を思い浮かべていたのかもしれない。しかし、私は、現代社会での「いき」を考える時、もっと広い対象を想定してよいと思っている。

さて、その九鬼は、「いき」の構造」の中で、「いき」を「垢抜けして、張りのある、色つぼさ」と定義した。その意味するところを、今の日本社会の文脈の中で考えてみたい。

3. 「いき」な人生、「いき」な国

「いき」の定義のなかで、「垢抜け」とは、九鬼によれば「現実に対する独断的な執着を離れた瀟洒として未練のない恬淡無碍の心」だそう。仏教における世界観を反映しているという。

私は、この「執着を離れた」とするくだりがことに好きだ。日本人のあの「甘え」は、親と子の間の、互いにどうしようもなく強い「執着」の結果だ。「いき」は、この「甘え」からきつぱりと卒業した「強い日本人」の姿をイメージしてくる。

もともと仏教は極めて個人主義的だ。悟りとは、ブツダが親とも家族とも離れて個人として真理を求めた結果到達できたものだ。その仏教が、幕藩体制の中で葬式仏教に墮落してしまった。日本人が「甘え」を卒業する一つの道筋は、葬式仏教でなく本来の仏教を求め、こともひとつの選択肢となるであろう。

次に、「張り」であるが、このくだりはことに重要だ。この点を、武士道の理想主義に求めるのが九鬼だ。しかし、多田は、「張り」に武士道もちだすことには賛成できない」として、「上方に対する対抗意識、武士に対する意地として、たとえば町奴のような階層ができてきて、そこに『意気地』が根をおろしたのではないか」と解説している。

私は、多田の町奴説にも魅力を感じる。そこに町民の強い独立心を感じる。が、九鬼の武士道説にも反対はしない。ただ、武士に「道」をつけるのは賛成できない。武士道には、「ムラ」のにおいを感じるからだ。

「武士道」も、それを唱える者

によつて様々であるが、新渡戸稲造の「武士道」では、その第一章で、「仏教の与え得ざりしものを、神道が豊かに供給した。神道の教義によりて刻みこまれたる主君に対する忠誠、ならびに親に対する孝行は、他のいかなる宗教によつても教えられなかつたほどのもので、これによつて武士の傲慢なる性格に服従性が賦与せられた。」（岩波文庫・矢内原忠雄訳）と解説する。

この様に服従や忠誠という言葉が登場すると、途端に「いき」でなくなる。私は、「いき」とはなにかをいう時、「武士」というだけで充分だし、あの逞しい戦国武士の精神、つまり「サムライ」を思えばそれで十分だと思ふ。

結局「張り」とは、世界に展開していった海洋民族のエネルギーが鎖国のもとで固く封印されたことに対する反骨精神、ことに幕藩体制の中で下位の身分として封じ込められた下級武士や商人の強い反骨精神が底流にあるのではなからうか。

「いき」の根本には、封印され封じ込められた海洋民族の精神が脈々と流れ、それが「現実に対する独断的な執着を離れた瀟洒として未練のない恬淡無碍の心」として、極めて洗練されたかたちであらわれたのが、「いき」であろう。

いずれにしても、この「張り」は「ムラの原理」ではない。武士あるいは町民の原理であり、極め

て個人主義的な理念である。九鬼は「いき」の最後に「色つぼさ」を置いた。たしかに「いき」には、文化のにおいが強くする。ここでいう「色つぼさ」は、芸術や文化を愛する者からごく自然に香りだす、その香りではなからうか。文化を愛せない者は、どんなに気取つてみても、「いき」ではない。

「いき」とはこの様に、日本人が海洋民族の如く海外に飛び出していった「サムライ」の精神を淵源として、西洋文化と共通する「自由」と「個人主義」を基底に、東洋の文化によつて高度に洗練された理念であろう。

多田は言う。「『いき』の構造」は、「ヨーロッパの中で、この本に注目する人がふえている」と。そうであれば、日本はどの国から見ても「いき」な国になりたものだ。



金子博人
(かねこ・ひろひと)

金子博人 法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程（商法）終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会（IFTA）会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員（東京工業品取引所）。日本フライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。